

銀色の実

笠利町立屋仁小学校 5年 城下 菜那

ある農家に年とった牛がかわれていました。名前は「かよこ」と言いました。人間でいうと七十才くらいのおばあちゃんでした。もう赤ちゃんも産めません。子どもが産めなくなった牛には、どこかに売られていく運命がまっています。そして、かよこは、もうすぐ自分がそうなることを知っていました。だから、かよこはこのごろ、あまり食よくありませんでした。

そんな毎日を送っていたある日のことです。かよこが、あんまり元気がないので、いつもえさをわけ合っている仲良しのすずめがたずねました。

「かよこさん、どうしたの？元気がないね。ダイエットでもしているの。」
それを聞いたかよこは、ちょっと笑っていました。

「ダイエット？もうそんな年じゃないよ。それどころか年よりは、どこかに売られてしまうんだよ。もうあなた達ともおわかれよ。」

と、悲しそうにいいました。それを聞いてすずめは自分まで悲しくなりました。それからしばらく考えると決心したようにいいました。

「かよこさん、元気を出して、ここから南の方に三つ山をこえたところに一本のせの低いねじれた木があるそうです。その木には銀色に光る実がなっていて、それを食べると若返ることができるそうです。今から行ってそれを取って来てあげる。」

それを聞いたかよこは一しゅん喜びましたが、すぐに首を横にふりました。

「山を三つなんて無理よ。そんなことをしたらあなたが死んでしまう。もう、いいのよ。」

と、悲しそうに笑いました。けれどすずめは、

「いいえ、私たちが食べる物がなくて、死にそうになった時、あなたは私たちにえさを分けてくれました。今度は、私たちが、おん返しをする番です。」

と、きらきらした目をしながらいいました。それから、すずめは、はねを元気よくふると

「楽しみに待っていてくださいね。」

と南の方へ飛んでいきました。

次の日、かよこは、あのすずめの姿をさがしました。本当に行ったのでしょうか。山を三つなんてとても無理なのに。

その次の日も、そのまた次の日もすずめは現れませんでした。ひょっとしたら、もうあんなことは忘れてどこかで仲間と遊んでいるかもしれません。一か月が過ぎました。その間、すずめは一度も姿を見せませんでした。明日はいよいよかよこが売られていく日です。でも、かよこは、今はもう自分のことより、すずめのこと頭がいっぱいでした。早くあの元気な顔をみたいとそのことばかり考えていました。

その時です。屋根の上でバサッと何かがぶつかった音がしました。かよこは急いで音の方へかけよりました。えさの箱の中で何か動いていました。バタバタと黒っぽいものです。かよこは顔を近づけてじっと見ました。すずめです。あの仲良しのすずめです。でも、羽はぼろぼろで、真黒によごれていました。

「だいじょうぶ、しっかりして。」

かよこは、やさしく舌でなめてあげました。すると、すずめは、弱々しい声で、「かよこさん、間に合った。よかった。」

と言って、一つぶの銀の実をかよこにわたしました。そして、

「かよこさん、これであなたは私たちとここでずっと暮らせますね。」

と、うれしそうに笑いました。すずめは、一か月もの間この銀の実をかよこにとどけるためがんばってくれたのです。

「ありがとう。ありがとう。」

かよこは、なみだを流しながら銀の実を食べました。それは、すずめの心のようにあったかい味がしました。体の底から元気が出て、こしがしゃんと伸びてくるようでした。かよこは、あっという間に、すっかり若い元気な牛に生まれかわりました。その姿をみたすずめは、かよこよりもっとうれしそうでした。すると、かよこは、口の中から銀の実のかけらを取り出してすずめに食べさせました。すずめも、あっという間に、元気なすずめになりました。

「ありがとう、かよこさん。これからも仲良く暮らしましょうね。」

かよことすずめは、にっこり笑いました。

